編 集 後 記

多根総合病院　副院長　渡瀬　誠

例年の如く，年末にすべての論文の編集作業がほぼ終了しほっとしている．

今年も 2016 年のノーベル生理学・医学賞に，東京工業大学の大隅良典先生が，オートファジーの仕組みを解明した功績により受賞の栄誉に輝いた．2011 年本医学雑誌が始まって以来，2012 年の山中伸弥先生の iPS 細胞の受賞に輝いてから 5 年連続であり，日本人の優秀さを物語る素晴らしい出来事である．

また 2016 年はリオデジャネイロオリンピックが開催され，日本は 12 個の金，8 個の銀，21 個の銅メダルを獲得した．お家芸である柔道は，男子が 7 階級全てで，そして女子は 7 階級のうち 5 階級でメダルを獲得（金 3，銀 1，銅 8）し圧倒的な強さを見せたことは記憶に新しい．レスリングの伊調 馨選手の前人未到のオリンピック 4 連覇も見事としかいいようがなく国民栄誉賞に輝いた．そして体操の内村航平選手が悲願の団体金メダルを獲得し，個人総合でも 2 連覇，その後プロ宣言した．日本人初というと，バドミントンでは高橋礼華，松友美佐紀選手の女子ダブルス金メダル，陸上男子 400m リレーでは銀メダル，私の好きなテニスでは錦織圭選手が銅メダルを獲得するなど話題性のあったオリンピックといえる．

一方，多根総合病院医学雑誌はというと　原著 6 編，症例報告 8 編，看護研究 1 編，合計 15 編の論文を投稿いただいた．創刊当初のねらいどおり医師 12 編，放射線技師 1 編，臨床検査技師 1 編，看護師 1 編など多職種からの投稿である．通常の医学雑誌に準じ，各論文には 2 名の査読者に査読をお願いし，編集責任者が最終 check をしているが，論文投稿を初めてする方や初心者も多く，小さな「てにをは」を訂正していただく簡単なものから，「大幅修正」を余儀なくされ論文を書くのが嫌になってしまうのではないかと心配するものもある．また不採用の場合もあり，私自身心を痛めることもある．査読者は「あら探し」をしているつもりは毛頭ない．ただいかにすれば優れた科学論文になるかを共に勉強し，著者に伝えているのである．訂正し完成するものもあれば，症例を重ねていただき再度の投稿を待っているものもある．そして時間のかかるその一連の過程は，論文を書いた者しかわからないし，何らかのメッセージを伝えられていると思う．その結果，著者だけでなく，指導者，査読者にも成長を与え，さらに言えば病院全体の成長に寄与していると考える．

さあ，次号では何編の優れた論文が投稿されるだろうか？

最後に，著者をはじめ，それぞれの論文に関わった方々，委員会の皆様，大変な調整をしていただいた事務局のご尽力に感謝申し上げます．